

2022年の生乳生産量

	数量(トン)	前年比(%)
1月	11万2921	4.5
2月	10万3011	4.5
3月	11万5328	4.4
4月	11万2406	3.7
5月	11万7330	2.9
6月	11万2524	1.5
7月	11万4480	1.6
8月	11万2222	0.8
9月	10万6399	-1.3
10月	10万7962	-1.9

※ホクレン帯広支所の受託数量

十勝管内で飼育される乳牛は約24万5000頭で、酪農家1戸当たりで200頭を超えている。頭数は全道の3割、全国でも2割弱を占め、国内の牛乳・乳製品の生産を支える主産地となっている。

十勝農協連によると、コロナ禍で乳牛・乳製品の消費が落ちた影響もあり、前年より増加幅は少なかったが5年連続で過去最多を更新した。一方、飼育戸数の減少には歯止めがかからず、3%減の1205戸。1戸当たりの飼育頭数は204頭になった。道内の大半の生乳を集荷するホクレンによると、十勝の生産量は約132万トンで振興局別で最も多く、32%を占める。

その中で長期化するコロナ禍によって国内の牛乳・乳製品が業務用を中心に需要が減少。牛乳の消費が低下し、乳製品では脱脂粉乳とバター需要が落ち込んで回復の兆しが見えない。規模拡大によって増えた生産量が需要を上回る状態が

続き、農協団体は生乳の生産抑制を酪農現場に求めている。管内の生乳受託数量は9月以降、生産抑制の効果で前年比マイナスに転じた。

酪農をめぐっては、世界的な穀物価格の値上がりや円安により、餌の配合飼料などが高騰。さまざまな生産資材価格が上がる中で、生産抑制を迫られて乳量を増やすことができず、副収入だった子牛価格も下落。酪農団体などは国の支援や乳価の期中改定などを要望し、国は飼料高騰対策で補てん金の交付を決め、ホクレンは11月1日取引分から8年ぶりとなる期中値上げを実施した。

それでも経営環境は依然として厳しく、需給改善への出口は見えない。この年末年始は、冬休みで学校給食による消費がなくなり、前年に続いて処理できない生乳が廃棄される恐れがある。酪農王国の十勝も再び大きなヤマ場を迎えることになる。



酪農

生乳余剰、十勝酪農も試練の時



生産抑制と飼料高で厳しい1年となった酪農界(大樹町)



株式会社ファームテックジャパン®

未来へつなげる農業へ

リサイクル・メイト®



循環型農業への第一歩

スラリー施与時のアンモニア揮散量は、施与されたアンモニア態窒素の23~55%にもなるので、窒素資源の有効利用の面からも、揮散防止は重要である。 [「草地学の基礎」(農文協)より]

- 生のスラリー・尿・堆肥の良質発酵化ができる
- 発酵期間が短い(冬期間でも発酵が進む)
- 切り返し・曝気不要、手間をかけずどんな施設でも使用可能
- 悪臭、ハエ・ウジの発生を強力に抑制

牛の歩行通路全体への散布で滑りやすさを改善しDD感染も抑制

堆肥づくりの経費を削減

※酪農経営成牛40~50頭の試算例

(単位:1000円)

年間所要経費の比較	項目	好気性処理(曝気処理)	嫌気性処理(資材添加処理)
	区別		
	処理資材費	0	143
	電気料	181	26
	敷料	256	192
	施設償却費	135	135
	機械償却費	540	259
	機械修理費	96	46
	計	1,208	801

[「自然浄化処理技術の実例」(地人書館)より 一部改編]

手間をかけずに堆肥の効果も向上

項目	区別	好気性処理(曝気処理)	嫌気性処理(資材添加処理)
	効果比較		
悪臭の発生抑制	中	中	大
害虫の発生抑制	中	中	大
処理作業の効果	中	中	大
労力節減	小	小	大
敷料の節減	小	小	大
疾病の防止	一	一	大
土壌の改良	中	中	大
連作障害防止	中	中	大
塩類障害防止	中	中	大
生産物品質向上	中	中	大
ふん尿処理コスト	大	大	小
所要処理施設	大	大	小

処理効果も大幅にUP

所要経費33%以上削減

[「自然浄化処理技術の実例」(地人書館)より 一部改編]

十勝向け 特別キャンペーン実施中 [5箱につき1箱プレゼント]

お問い合わせは... 担当/中村 TEL 080(8292)4126
本社 北海道札幌市清田区真栄4条2丁目8-1